

穆佐城跡



穆佐城跡遠景 大淀川下流域を望む



出土遺物



空堀Ⅱ

国指定史跡 穆佐城跡

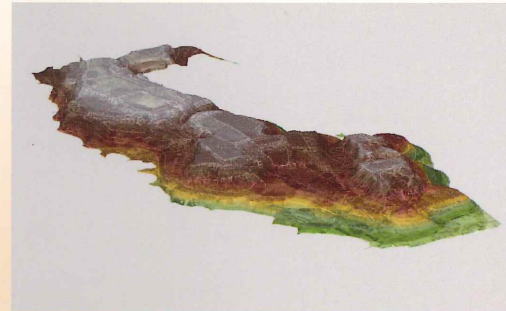
◎指定年月日 平成14年3月19日 ◎所在地 宮崎市高岡町小山田

日向三高城に数えられる穆佐城は、建武2年(1335)に文献に現れる宮崎県内で最も古い時期から存在する山城の1つです。城という天守のイメージが強いですが、穆佐城を始め、中世の山城には天守はなく、山を切り盛りして曲輪、堀切、土塁などを築き防御性を得ていました。穆佐城は現代までこれらの遺構が良好な状態で残され、今も体感することのできる貴重な遺跡です。

穆佐城関係略歴表

西暦(年号)	領主	主な出来事
1335(建武2)	(南北朝期の争乱)	伊東祐広と土持宣栄、伊東祐持らが穆佐城で戦い、伊東祐広が敗れる。
1336(建武3)		新田方、肝付兼重、軍勢数百騎を率いて穆佐城を攻めるが、伊東祐持・土持宣栄らによって防がれる。
1337(建武4)		足利氏一門である畠山直顕、足利尊氏の命を受け穆佐城に入る。
1357(延文2)		畠山直顕、加治木で島津氏と戦い、敗れて穆佐城へ帰る。 畠山直顕、菊池武光によって穆佐城を追われ三保城へ逃げる。
1403(応永10)	(島津氏と伊東氏の争乱)	穆佐など大淀川以南の地、島津元久の手中に入る。元久の弟、島津久豊、穆佐城に入る。 同年5月2日、穆佐城内「坪之城」にて島津忠国誕生。
1404(応永11)		島津元久、日向、大隅の守護職となる。
1411(応永18)		島津元久没、久豊が跡を継ぎ守護職となる。
1412(応永19)		伊東祐立が穆佐城を攻め落とす。
1424(応永31)	久豊、再び大淀川以南に進行。	
1425(応永32)		久豊没。子である忠国が跡を継ぎ守護職となる。その後、穆佐城を取り戻す。
1445(文安2)	伊東氏	伊東祐堯、穆佐城を攻略。落合治部少輔を城主とする。 以後約130年間、穆佐城は伊東氏の支配下となる。
1577(天正5)	島津氏	伊東氏は日向を追われ、島津氏の領国となる。穆佐城も島津氏の手に。
1600(慶長5)		稲津掃部助により宮崎城落城。穆佐城を攻めるも穆佐地頭川田大膳亮国鏡、城を固く守り稲津勢退去。
1602(慶長7)～1615(元和元)		穆佐城は廃城となり、城内に住んでいた家臣は麓に下る。

穆佐城の地形



左図は穆佐城の立体図です。穆佐城はシラスの丘陵を利用して城郭が築かれています。そのため地面の掘削が容易であり、空堀の規模は巨大で、切岸は垂直に近い角度となっています。

華南三彩出土状況

C 地区虎口調査状況

B 地区堀断面

穆佐城散策マップ

穆佐城は大きな堀によって4つの地区に区分され、さらにその中を段差や堀、土塁などによって区画した曲輪が存在します。

4つの地区1つ1つを大きな曲輪として捉えると、南九州で多く見られる構造となっています。周囲の水田との比高差は45m程です。



戦闘のための曲輪群

A地区は面積の小さい曲輪と細かく巡らされた堀によって構成されています。城の北東側に位置し、大淀川下流域を見渡せる非常に眺望が良い立地となっています。その構造や立地から戦いの際に活用された曲輪群と考えられています。



A地区堀底から曲輪群を見上げる

家臣の住まう所

C地区は1つ1つの曲輪の面積が最も広がっています。ただし大きな土塁や複数の曲輪を組み合わせで守られているB地区と比較すると防御性が低く、城主ではなく家臣団の屋敷地と推定されています。

戦闘のための曲輪

D地区は1つの大きな曲輪に横堀を巡らせるという構造です。形態は異なりますが、立地からA地区と同じく戦いに備えて配置された曲輪と考えられます。

島津忠国誕生の地

B地区にある曲輪20は、島津忠国が誕生した「坪之城」の推定地です。発掘調査でも忠国が生きた時代、15世紀代を中心とした遺物が出土しています。

強固に守られた主郭

B地区は穆佐城の主郭と想定される曲輪が所在する地区です。防御性を高めるために、大小の曲輪を組み合わせ、4つの地区の中で最も複雑な構造となっています。

主郭と考えられている曲輪は、西側を幅約30m、深さ10m以上もある堀と高さ約3mの土塁によって守られています。発掘調査では、曲輪の中央と東端で埋められた堀などが見つかっています。



主郭土塁

★ 説明板ポイント

— おすすめ散策路

千田嘉博氏作成縄張図

穆佐城跡ガイダンス施設



城の歴史の解説パネルや、発掘調査の出土遺物を一部展示しています。例年秋～冬期には「穆佐城ボランティアガイドの会」による城跡ガイドも受け付けています。詳しくは、宮崎市文化財課までお問い合わせください。

■開館日／年末年始を除く、土日祝日のみ(午前10時～午後3時開館)



基本用語

くるわ 曲輪 堀や土塁、切岸などによって周囲から区画された平坦面のことです。この曲輪を組み合わせで城が構成されています。「郭」とも書きます。

こぐち 虎口 城や曲輪の出入り口のことで「小口」とも書きます。敵の進入路として弱点ともなる場所なので、その構造や配置に工夫が凝らされていました。「枡形(ますがた)虎口」、「くい違い虎口」などその構造によって名前が付けられています。

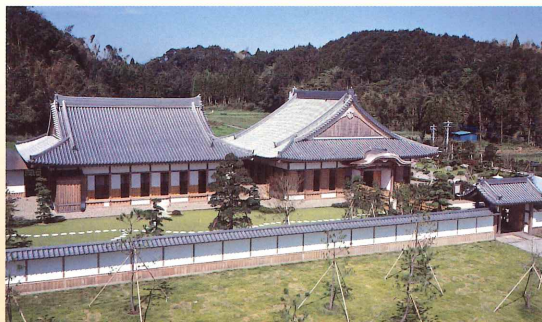
しゅかく 主郭 その名の通り主となる曲輪のことです。近世城郭では本丸と呼ばれます。

お問い合わせ 宮崎市教育委員会文化財課

佐土原城関係略歴表

西暦(年号)	領主	主 な 出 来 事
南北朝期?	田島氏	この頃、田島氏が佐土原城を築城したとされる。
1427頃	伊東氏	伊東氏、田島氏を支配下に入れ、佐土原城も手に入れる。
1536(天文5)		伊東義祐、佐土原城に入る。
1537(天文6)		佐土原城火災に遭い、義祐は宮崎城へ移る。佐土原城は五年後に修築。
1568(永禄11)		伊東義祐、伊東氏48城を置き、佐土原は政治経済の中心として栄える。
1577(天正5)	島津氏	伊東氏、親族である大友氏を頼って豊後へ落ちのびる。
1579(天正7)		島津家久が佐土原領主となる。
1588(天正16)		島津氏、木城町根白坂で豊臣氏と戦い敗北。 島津家久、豊臣氏に降伏する。羽柴秀長は佐土原城の“南の城”に駐留する。 島津家久没。豊久が継ぐ。
1600(慶長5)	島津氏	島津豊久、関ヶ原の戦いに西軍として参戦するが討死する。 伊東氏の稲津掃部助、宮崎城を落城、佐土原城下にもたびたび侵入するが退けられる。
	徳川氏 直轄領	城主を失った佐土原は、徳川氏の直轄領となり、庄田三太夫が代官として治める。
1603(慶長8)	(佐)島津氏 (土)島津氏 (原)島津氏 (城)島津氏	江戸幕府が開かれると共に、家久の従兄弟にあたる島津以久が、佐土原藩の初代藩主として入城。
1611(慶長16)		佐土原城大改修。天守、櫓、塀門をつくったとされる。
1625(寛永2)		居館を山下の二之丸(現在の鶴松館の位置)へ移す。
⋮		⋮
1870(明治3)		十代藩主島津忠寛、広瀬へ転城する。佐土原城は廃城となる。
1871(明治4)		廃藩置県により佐土原藩は佐土原県となる。この年、広瀬城の築城を中止。

佐土原城をもっと知りたい人に



佐土原城跡にある宮崎市佐土原歴史資料館「鶴松館」では、佐土原城と佐土原の歴史に関するさまざまな資料が展示されています。

お問い合わせ

宮崎市佐土原歴史資料館「鶴松館」

TEL.0985-74-1518

開館日／土日・祝日のみ

(但し、5/15～6/14は特別開館につき休館日なし)

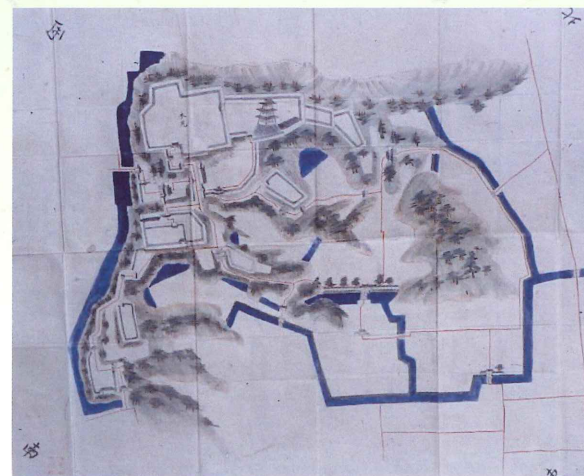


佐土原城跡

国指定史跡 佐土原城跡

◎指定年月日 平成16年9月30日 ◎所在地 宮崎市佐土原町上田島

佐土原城は、南北朝期に築かれたとされる山城です。中世宮崎平野を治める拠点として、城には曲輪が設けられ、土塁や堀切が築かれました。江戸時代には現在の鶴松館の部分に佐土原藩主の屋敷が建てられ、明治時代の廃城まで使用されました。また近年、本丸から発見された天守台や鯉瓦は、貴重な発見例として注目されました。



天正年中佐土原城図

(日南市教育委員会蔵)

江戸時代に、戦国時代(天正年間)の佐土原城の姿を描いたものといわれています。

ただし、本丸に描かれている天守は、天正年間には存在していなかったと考えられています。

佐土原城散策マップ

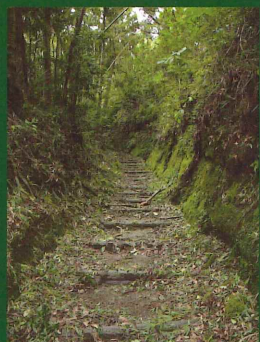
佐土原城は、丘陵を削って多くの曲輪を造り、尾根や谷に道を設けた山城です。

曲輪の中でも、本丸や南の城は特に広いため、城主や重臣の屋敷があったと考えられます。

敵を防ぐための登城路

佐土原城の登城路は、どの道も深い谷の間を上るように造られています。

登城路を上ってくる敵に、谷の上から攻撃することを目的としています。



なわばり縄張り

城全体の設計のことで、曲輪や堀、土塁などの配置や構造、通路の設定などを記した図面のことを縄張り図といいます。実際に地面に縄を張って設定したことからこの名前がついています。

どるい土塁

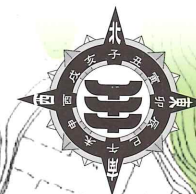
敵の攻撃を防ぐために曲輪や城の周囲に土を盛って造られた防御施設のことです。城内にある土手状の高まりは、土塁の可能性が高いといえます。

きりぎし切岸

曲輪周囲の斜面を削り、角度を急にして敵が上りにくくしている場所です。

ほり堀

敵の侵入を防ぐため掘られた大溝のことです。山城ではそのほとんどが水の張られていない空堀です。



日本最南端の天守台の発見

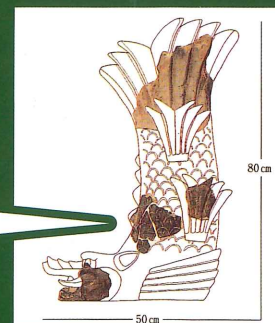
「天守と天守台」

天守とは、城の中にある中心的な櫓のことで、その下の石組みを天守台といいます。



平成8年、本丸の発掘調査により、11m×13mの天守台が確認されました。外側の大きな石は、日向市の細島付近から運び込まれたと言われています。

金箔鯨瓦の発見



★ 説明板ポイント

— おすすめ散策路

八巻孝夫氏作成縄張り図



天守台の調査では、天守に葺かれていたと考えられる多くの瓦が出土しました。

上の図は、調査で出土した金箔鯨瓦を復元したものです。色のついた部分は、実際に調査で出土した部分です。

瓦の表面には、金箔がかすかに残っています。

TEL.0985-85-1178 FAX.0985-84-2222



宮崎市城跡之図

一、佐土原城跡

二、伊東氏城跡

三、那珂城跡

四、那珂城跡

今の広瀬幼稚園、広瀬小学校、広瀬中学校と南の丘陵を合わせた部分にあたります。明治時代が始まるにあたり、佐土原城から移って人心を一新するために築こうとした城です。築城開始から一年あまりで発令された廃藩置県で中止されたために、完成に至りませんでした。が、国道一〇号線より広瀬小学校・広瀬中学校が一段高くなっており、工事の名残を今に留めています。

五、那珂城跡

宮崎県農業試験場近くにある丘陵に築かれた山城で、諏訪城とも言います。丘陵を大きく削って平坦地を作り、堀で仕切って三つの曲輪を作っています。関ヶ原の戦いの際、宮崎城を落として佐土原城に侵攻しようとする伊東軍を、佐土原に残っていた老兵がこの城に集まり迎え撃つたと伝えられています。

六、宮崎城跡

宮崎市街地の北の端、現在の池内町と上北方町にまたがる丘陵上に築かれた城です。丘陵上の曲輪部分だけで十万㎡に及ぶ広大な城域を誇り、さらに曲輪や堀切、虎口などが非常に良好な状態で残されています。十六世紀後半に城主となった上井寛兼は、城内の様子や、政治、戦い、日常の信仰や儀礼などを細かに記した日記を残しています。良好に残された遺構と史料性の高い日記が揃っていることで、宮崎城の歴史的価値は非常に高いものと評価されています。伊東氏四十八城の一つで、一時期は伊東義祐も入城しています。

七、倉岡城跡

大淀川左岸の小丘陵上に築かれた城です。穆佐城と宮崎城のほぼ中間に位置し、両城の中継地の役割も担っていたと考えられます。丘陵を堀によって大きく三つの地区に区分し曲輪を築いています。伊東氏四十八城の一つで当時の城主は野村隠岐守でした。

八、宿塚城跡

宮崎市街地の西、生目地区にある丘陵上に築かれた城です。現在は開発によりほとんど旧状を留めていません。伊東氏四十八城の一つで当時の城主は平賀刑部少輔でした。

九、天ヶ城跡

高岡町中心街から北西方向にある丘陵上に築かれた城で、内山城とも呼ばれていました。公園建設によって大部分が失われてしまいましたが、大きく六つの曲輪があったとされています。現在山上にそびえる天守(歴史民俗資料館)は、史料や発掘調査の成果に基づいたものではありません。伊東氏四十八城の一つです。

十、曾井城跡

宮崎市街地の南西にある丘陵上に築かれた城です。島津氏と伊東氏の争いの舞台にもなった城ですが、その後の開発により大部分が失われてしまいました。伊東氏四十八城の一つです。

十一、清武城跡

清武川左岸の丘陵地にある城です。本丸を頂点に、広い曲輪が環状に取り囲んでいるほか、これらの曲輪外側の丘陵も城として利用されました。伊東祐兵による鉄肥攻めの本陣となったほか、関ヶ原の戦いの際には城主稲津掃部助が各地を転戦する拠点となるなど、歴史上重要な役割を果たした城でもあります。高速道路建設に伴い発掘調査も行われ、掘立柱建物や石積みが確認されました。

十二、辰電、辰屋城跡

清武川支流の合流地にある城です。細長い丘陵の両脇を主郭とし、中央の尾根を空堀で仕切り、小さな曲輪や土塁などの防御施設を備えるなど工夫を凝らしています。伊東氏四十八城の一つで、近くには当時城主を務めた長倉河内守の墓もあります。



倉岡城跡遠景

宮崎城跡遠景

那珂城跡遠景

広瀬城跡遠景